

弘前大学
広報誌

ひろだい

vol.
15
2010.9



特集

地域医療と救急専門医養成に貢献する
高度救命救急センターが稼働開始。

[シリーズ]花開く研究

「ネット・ケータイ問題」を
あらゆる角度から研究する。

大谷 良光 教育学部技術教育講座教授

地域の「知」の拠点を目指して、
産学官で取り組む
「医用システム開発マイスター」養成塾

[学内トピックス]話題の広場から

平成21年度弘前大学学位記授与式・
平成22年度弘前大学入学式を挙 他



高度救命救急センター外観



救急車専用入口

ヘリコプターの到着に備え、待機する緊急車両

特集

地域医療と救急専門医養成に貢献する高度救命救急センターが稼働開始。

地域住民の大きな期待のもと、今年7月に診療開始となった高度救命救急センター。青森県で唯一の、高度救急医療を担う施設の概要と、現在の状況について、高度救命救急センター長の浅利靖教授にお話をうかがいました。

高度救命救急医療を担う青森県で唯一の施設

平成22年7月1日、弘前大学医学部附属病院に、青森県唯一の高度救命救急センターが設置されました。

救命救急センターとは、命に関わる突然の病気や、予期せぬ交通事故などで重篤な状態に陥った傷病者を365日24時間体制で受け入れ、救命救急医療を提供する施設です。その救命救急センターの中でも“高度”の名称を冠するのは各県に一カ所、いわば地域の救急医療の最後の砦。弘前大学医学部附属病院高度救命救急センターでは、救命救急センターの機能に加え、重症全身熱傷、指の切断の再接着手術、急性重症中毒なども常に受け入れ、弘前大学医学部附属病院の各診療科の専門医と救急科専門医が専従の救急医療チームを組み、高度な先進医療を担う大学病院ならではの救急医療が行なわれます。

さらに、この施設には、我が国では類を見ない際立った特徴があります。それは、被ばく医療を担う施設であるということです。多くの原子力関連事業を抱える青森県において、緊急被ばく医療に対応する体制を整えることは、必要不可欠です。平成21年度に新設された弘前大学被ばく医療教育研究

施設と連携することにより、新たな診療分野が展開されます。

大学病院の外来診療棟屋上には、ヘリポートが設置され、広範囲から迅速に患者を搬送することが可能です。防災ヘリの着陸も可能で、融雪機能と照明設備を整備しています。

設置を実現するために全学挙げての活動を展開

弘前大学医学部附属病院は、これまで半世紀以上にわたり、青森県はもとより北東北地域の中心的医療機関としての責務を果たしてきました。しかし、医師不足による津軽医療圏の救急医療体制崩壊への危惧、また、青森県における緊急被ばく医療体制の整備が必要とされることから、弘前大学では遠藤正彦学長の強いイニシアティブのもと、県内唯一の高度救命救急センターの設置を目指し、関係機関に働きかけてきました。

その結果、平成20年12月、文部科学省に概算要求していたセンターの建物及び医療機器の整備経費が、21年度予算原案で認められました。同じく12月、青森県から救命救急センターの設置要請がありました。こうして、本学は施設の整備に向けて動き出したのです。

高度救急医療に志を抱く若手医師の養成にも貢献

高度救命救急センターは、人材育成という役割も持っています。将来、青森県の救急医療を担う救急専門医を養成し、看護師や救急隊員などへも学ぶ場を提供します。救急医療の現場では、平素では稀にしか経験することのないショック状態や意識障害、呼吸不全、心停止などの重篤な病態の傷病者が高頻度で搬送されるため、常に最悪の事態を想定し最善の救急医療を実践する習慣を体得できます。

初期研修では、救急医療における基本的な診療能力の習得、さらに緊急を要する外傷や疾病に対する適切な診断・初期治療能力の習得を目標とします。また、総合診療部との連携により、「プライマリケアにおける基本的な診療能力」の習得も、適切な指導医のもとで可能です。初期研修の行動目標は、

- ①バイタルサインの把握ができる
- ②身体所見を迅速かつ的確にとることができる
- ③重症度と緊急度の判断ができる
- ④重症外傷、ショック、意識障害、呼吸不全、頻度の高い救急疾患の初期診断と対応ができる
- ⑤二次救命処置（ACLS）を一人で実践できる



外来診療棟の屋上に設置されたヘリポートに到着したヘリ。患者は迅速に適切な診療が受けられる



特殊救急外来に対応する特殊処置室



救急処置室

以上5項目が掲げられています。

後期研修医のためには、以下の3コースが設置されています。

A) 救命救急実践コース

救急患者の初期診断・初期治療を救急チームのリーダーとして戦略的に組み立てられるようになることを目標とするコース。

研修期間：3か月以上の任意の期間
募集人数：若干名

B) 救急科専門医養成コース

救急科専門医の資格を習得することを目標とした研修を行なうコース。救急患者の初期診断・初期治療を習得すると同時に、救急医学が専門とする救命医療・蘇生、外傷初療、中毒に関して十分な研鑽を積む。また、教育などにも従事するためACLS、ICLS、JPTEC、JATEC、ISLSなどのインストラクターの資格も取得することをめざします。

研修期間：3年間
募集人数：若干名

C) 救急指導医養成コース

救急指導医は10年間の救急指導医指定施設での勤務実績が必要なため、救急・災害医学講座に所属し、救急医療の全般を習得すると同時に蘇生、外傷初療、中毒、重症熱傷、緊急被ばく医療、災害医療などについての教育・研究も行います。また、日々の臨床で感じた疑問などを追究するため臨床・基礎研究を実践し医学博士を習得し、research spiritを兼ね備えた救急指導医を目指します。

施設の機能を十分に果たし 医師不足解消につなげたい

稼働したばかりの高度救命救急センターですが、診療開始前からマスコミの報道などが頻繁にあり、すでに地域住民には広く認知されています。診療開始以来、津軽地域の高度救急医療を担うという役割は十分に果たしているものの、現状での課題はまだあります。浅利教授は「一番の課題は、医者が少ないとい

うこと。現在、14人の医師がいますが、そのうち3分の2が各診療科からの出向です。ここには重症患者が頻繁に運ばれてきますし、入院患者の治療もあります。当直明けでもなかなか帰れないという状況も珍しくありません」

医師不足は全国の多くの医療機関に共通する問題ですが、早期に解消しなければ、センターの機能にも支障をきたします。本学では引き続き、医師の確保に全力を注いでいます。

けれども、やる気ある若い医師にとって、県内でただ1カ所の高度救命救急センターで医療にあたるのは魅力あることであり、こうしたメリットを訴えることが、医師不足解消の鍵を握るといえます。浅利教授は「ここでは、通常ではめったにみられない重症の症状をみることがありますから、3か月から6か月もここで経験を積めば、自信がつくと思います。最悪の事態で最善の医療をする。それは、医師としては最高の舞台です。また、自分たちががんばったことで患者さんが回復してくれた時の充実感は、とても大きいものです」と、研鑽の場とし

ての価値を説明します。研修生の受け入れはこれからですが、すでに本学医学部出身の開業医から研修についての問い合わせがあるなど、医療従事者からも高い関心が寄せられています。また、「県外で働く医師が、ここで救急医療に携わりたいと考え、青森に戻ってきてくれたらいいと思います」と、浅利教授は話します。

地域に貢献できることが なによりの喜びと誇り

高度救命救急センターの設置に伴い、当初から、大学病院の各診療科の業務も過密化することが予測されていました。これに備え、院内ではできる限りの協力体制を敷いて対応していますが、これまで円滑な医療が実施されているのは、病院スタッフの使命感に負うところが大きいと、浅利教授は話します。高度救命救急センターの誕生が、病院全体のスタッフの意識を高めるという効果も発揮しているといえます。

地域住民や、地域で活躍する医療従

事者の大きな期待のもと、稼働し始めた高度救命救急センター。浅利教授は「地域に貢献できる施設が完成したことは、大学にとってもたいへん喜ばしいことであり、大きな誇りでもあります。地域に胸を張れるような救命救急医療施設でありたいと思っています」と、今後に向けての決意を語ります。



CT室



体表面モニター・被ばく医療器材

高度救命救急センター長
浅利 靖 (あさり やすし)

救急・災害医学講座 教授。日本救急医学会救急科専門医・救急指導医。阪神・淡路大震災、パプアニューギニア津波災害、トルコ地震などの災害現場で医療経験は多数。平成16年に弘前大学に赴任。

学生の得意分野を存分に活かし「ネット・ケータイ問題」をあらゆる角度から研究する。

近年、ネット社会の進展により、子どもたちは常にネット被害の危険にさらされています。深刻化する「ネット・ケータイ問題」を対象に、今日的な課題に取り組むため設立されたのが、弘前大学教育学部「ネット・ケータイ問題」研究プロジェクト。その研究内容と、これまでの成果をご紹介します。



大谷教授とネット・パトロール隊のメンバー。



毎月発行している
ネット・パトロール隊ニュース。



ネット・パトロール隊の
佐藤雄哉隊長



ネット・パトロール隊の
大野絵美副隊長



ネット・パトロール隊の活動の様子。



大谷 良光 (おおたに よしみつ)

教育学部技術教育講座 教授
あおもり生活指導実践研究所 所長

1948年生まれ。信州大学教育学部卒業後、東京都公立中学校教諭、東京学芸大学非常勤講師として28年間、技術教育・生活指導実践、研究を展開。動機ながら東京学芸大学大学院教育学研究科を修了。弘前大学では、教員養成学研究開発センター副センター長として学校サポーター実習等教員養成臨床科目をメンバーと協働で立ち上げる。

学生によるボランティア、ネット・パトロール隊の活躍

「弘前大学 ネット・パトロール隊」が活動する一室。そこには、パソコンや携帯電話の画面を見つめ続ける学生たちの姿があります。活動を開始したのは、2008年12月。弘前市教育委員会からの依頼で「あおもり生活指導実践研究所・学校裏サイトパトロール隊」が発足し、2009年8月、現在の名称に変更されました。今年5月31日にはむつ市教育委員会とも協定を結び、むつ市の児童・生徒が書き込むサイトの巡視も行っています。また、今年度から県教委が始めた「ネット見守り体制促進事業」のモデル校6校に対し、ネット見守り隊の活動支援もしています。

ネット・パトロール隊ではメンバーを7グループに分け、曜日ごとに分担し、一人1時間ほど掲示板などの監視・探索を行っています。問題のある書き込みを見つけたら、連携する各市教委に通報し、そこから該当する学校へ連絡がいくよう体制が整っています。大学生による、こうした監視活動は、全国でも珍しい事例です。これまでに自殺予告らしき書き込みを9件発見し、そのうち深刻だと思われる3件については学校から警察に連絡し、発信者を突き止めて対応することができました。また、市教委への報告から指導に至り、改善された学校裏サイトも見られるなど、ネット・パトロール隊の果たす役割は大きくなっています。

実態調査で現状を把握し関係機関へ働きかける

ネット・パトロール隊は、弘前大学教育学部「ネット・ケータイ問題」研究プロジェクト(代表・大谷良光教授)の取り組みの一環です。本プロジェクトは、主に青森県内における「ネット・ケータイ」問題を対象に研究するとともに、県内の関係諸機関と連携し、ネットいじめに苦しむ子どもたちへの支援事業や、有害情報から子どもたちを守るための事業を行うことを目的としています。

具体的な研究・事業としては、裏サイト等の監視・探索活動のほか、県内のネットいじめの実態調査、その克服指導の実際と、よりよい指導についての研究、「有害情報」系問題の調査研究、出前授業や教員研修などの実施、県内の関係諸機関と連携したネットワークづくりなどが盛り込まれています。

ネットの世界の移り変わりは激しく、「ネット・ケータイ問題」に取り組む上で、実態調査は常に必要です。本プロジェクトではこれまでに、「ケータイ問題・ネットいじめ・リスク教育についての大学生調査」(2009年6月)、「携帯電話販売店の未成年者に対する販売対応聞き取り調査」(2009年10月)、「高校生の『ケータイ被害』予防措置状況と有害情報意識調査」(2009年10月)、「ケータイ不快・恐怖体験調査」(2010年1~2月)を行ってき

ました。携帯電話販売店への聞き取り調査では、フィルタリングが丁寧に説明されているのは調査した19店のうち約半数で、学校裏サイトやネットいじめ等のインターネットリスクを説明していないなど、対応の実態が明らかとなりました。この結果を受けて、携帯電話会社4社へ要請書を手渡したところ、販売対応の改善がみられました。

教員を目指す学生にとって大きな強みとなる実践教育

本プロジェクトにはもう一つ、大きなねらいがあります。それは、ネット・ケータイリスク教育の実践を通じて、教員を目指す学生や現職教員の教育力を向上させることです。

ネット・パトロール隊の学生たちは、昨年度からラボ・バス事業と連携し、県内の各学校で児童・生徒、教員、保護者を対象とした出前授業や講演を行なっています。ネット・パトロール隊による「ネット・ケータイリスク教育検定」で1級の資格を取得した隊員のみが授業を行なうことができ、確かな知識と指導力、責任感を持ち、各対象に合わせて開発するリスク教育プログラムを実践します。隊員を指導する大谷教授は、「いま、現場でこの問題に対応できる教師は少ないので、ここで実践的な能力を養うことは、彼らが教員となった時に大きな強みとなるはずです」と語ります。

ケータイ世代だからこそ生み出せる成果がある

本プロジェクトは「ネット・ケータイ問題」に総合的に取り組んでいます。その実状は複雑で、容易に解決できるものではありません。ネット・パトロール隊の佐藤雄哉隊長(教育学部3年)も「最初は掲示板を監視していましたが、最近はプロフ、SNSへの書き込みが増えていきます」と、監視の目が届きにくくなる傾向を実感しています。

しかし、ネットでのやりとりには隠語が多用されるなど、若者文化を反映しているため、ケータイ世代である隊員たちの力は必要不可欠です。大野絵美副隊長(教育学部3年)は「高校生と話をしてみると、みんなケータイに頼っているという自覚がありながら、手放せない状況に陥っていることがわかります。生徒たちは、現状をちゃんと分かっている。そこに解決の糸口があるのでは」と思っています。年齢の近い生徒たちの思いを理解した上で、ネット・ケータイの正しく安全な利用を訴えたいと考えています。大谷教授も「学生たちの協力によって、ここまで研究を進めることができました。そして、学生たちも役割を得る

ことにより、自分自身を成長させています」と、学生主導の取り組みの意義を語ります。

発足時12名だったネット・パトロール隊は、現在では教育・理工・人文学部から57名の学生が集まる組織になりました。その中には、中学・高校時代にネットいじめやケータイ被害に遭った経験を持ち、被害者のつらさが分かるだけに「自分も何か手助けできれば」と、ボランティアに参加する学生もいます。大谷教授は、「サイトの監視は難しいが、アドレスを探索するのは『砂丘でパチンコの玉を磁石で探す』と同じほど困難なこと。そこで、多くの人手が必要なのです」と、さらなる協力を求めます。

日々深刻化していくネット・ケータイ問題。学生の得意とする分野を活かした研究活動の成果に、各方面から期待が寄せられています。



教員養成の側面も担う「ネット・ケータイリスク教育」。

平成21年度弘前大学学位記授与式を挙

3月24日、平成21年度弘前大学学位記授与式が、弘前市市民会館において、来賓、関係者出席の下、厳かに行われました。

最初に遠藤学長から学位記が各学部のそれぞれの代表の学生に手渡されました。

引き続き学長告辞、卒業生答辞、弘前大学創立60周年記念歌、弘前大学学生歌の演奏が行われ、最後に「ほたるの光」を出席者全員で斉唱し、式典を終えました。

この日は天候にも恵まれ、卒業、修了生の門出を祝福しているようでした。

式典終了後は、記念写真に収まるグループや後輩達から胴上げの祝福を受けるグループなど、市民会館前は、いつもながらの光景が繰り広げられました。

また、大学院学位記授与式は同日創立50周年記念会館みちのくホールで、教育学部附属学校園の卒業式は、小学校が3月14日、中学校が3月10日、特別支援学校が3月13日、幼稚園が3月16日に各学校園においてそれぞれ執り行われました。



学位記を授与される卒業生

平成22年度弘前大学入学式を挙

4月6日、弘前市市民会館大ホールにおいて平成22年度弘前大学入学式が行われました。各学部の新入生を迎え、厳かに挙行されました。

式典は、これからの大学生活に期待を膨らます新入生やその保護者の方々が待ち受ける中、弘前大学フィルハーモニー管弦楽団の演奏で始まりました。

続いて、御来賓、役員及び部局長の紹介、入学許可、遠藤学長の入学式告辞、新入生代表による学生宣誓があり、最後に本学名誉教授の安達弘潮先生の指揮のもと、弘前大学フィルハーモニー管弦楽団及び弘前大学混声合唱団による「弘前大学学生歌」が演奏され、晴れの式典が終了しました。

市民会館前の駐車場では、記念撮影する保護者やサークルへ勧誘しようと様々な趣向を凝らして集まった学生等で、いつもながらの賑やかな歓迎風景が見られました。

また、弘前大学大学院入学式は、同日創立50周年記念会館みちのくホールにおいて、教育学部附属学校園の入学式・入園式は、小学校が4月7日、中学校が4月8日、特別支援学校が4月9日、幼稚園が4月13日に各学校園においてそれぞれ執り行われました。



学生宣誓

「医用システム開発マイスター」養成塾 平成22年度基礎コース開講式を挙

4月16日に、平成20年度文部科学省科学技術振興調整費・地域再生人材創出拠点の形成プログラムに採択された「医用システム開発マイスター」養成塾に7名の第2期受講生を迎え、大学教職員、自治体・青森県関係者、地域企業関係者など約100名の出席を得て、基礎コース開講式を挙行し、併せて、医用工学に関する記念講演会を開催しました。

同事業は、青森県内企業技術者を対象に、医療機器・検査装置などの医用システムの開発を先導できる中堅技術者を育成することを目標としています。受講生は、基礎コースを半年、アドバンスコースを1年半受け、「医用システム開発マイスター」を目指します。

開講式では、遠藤学長が、「養成塾で精進し、素晴らしいリーダーとして成長されるよう期待する」と式辞を述べ、受講生を激励しました。櫻庭青森県商工労働部長の式辞(永井岳彦氏代読)、東青森県工業会長の祝辞に続き、受講者代表からは、「地域再生の原動力となるよう、研鑽に励みます」と決意が述べられました。



関係者による記念撮影

坂田文部科学事務次官(当時)が弘前大学を視察

4月28日、坂田東一(当時)文部科学事務次官が、本学を来訪しました。

坂田次官(当時)は、冒頭に遠藤学長から本学の概要及び主要な取り組みについて説明を受け、今後の大学運営等について意見交換を行った後、大学内の施設を約2時間に渡って視察しました。

文京町キャンパスの視察では、産学官連携・社会貢献の拠点施設である創立60周年記念会館「コラボ弘大」において、加藤研究・産学連携担当理事から文部科学省都市エリア産学官連携促進事業により研究・開発が行われたプロテオグリカン(人体の軟骨を構成する物質の一つ)の研究成果や開発された製品について、また、文部科学省科学技術振興調整費採択事業により開設された精密機器の設計・製造を担う地域の技術者を対象に医用システムの研究開発を先導できる人材の育成を目指した研修プログラム「医用システム開発マイスター養成塾」について説明を受け、坂田次官(当時)は熱心に聞き入っていました。

本町キャンパスの視察では、平成22年7月に本格稼働する医学部附属病院高度救命救急センターにおいて、浅利センター長から緊急被ばく医療に対応した特殊処置室などの設備や重症全身熱傷を治療するBCU(無菌室)について説明を受けたほか、外来診療棟屋上に設置されたヘリポートではドクターヘリや防災ヘリによる救急搬送について説明を受け、同センターが地域の救急医療に果たす役割の大きさについて、坂田次官(当時)は積極的に質問をするなど関心を寄せていました。



救命救急病棟で説明を受ける坂田次官(当時)ら



外来診療屋上のヘリポートで説明を受ける坂田次官(当時)ら

弘前大学創立50周年記念会館改修記念式典を挙

本学では、学会・研究会等学術研究の交流、公開講座等大学の開放、学生の文化活動など大学の活性化を推進するための多目的ホールとして活用するため、創立50周年を記念して建設された「創立50周年記念会館」が築後10年を経過し、また同会館で事業を展開していた放送大学青森学習センターが「創立60周年記念会館『コラボ弘大』」へ移転したことを機に、平成22年1月から改修工事を行い、このほど終了しました。

改修を終えた創立50周年記念会館の2階は、岩木山の全容を見ることができる「岩木ホール」をはじめとした会議室が新設され、併せて既設1階の「みちのくホール」も舞台天井に音響反射板が取り付けられた他、連絡通路も新設されるなど大規模な機能改修がなされ、本格的な演奏会も開催できるようになりました。

この改修工事の完了を記念して、去る4月26日に大学関係者のほか弘前市長を始め関係者など約70名とともに改修記念式典を挙行しました。式典では、遠藤学長が「創立50周年記念会館は、機会のあるごとに改修を加えながら、大切に使用していきたい。そして、この創立50周年記念会館が、本学の創立100周年に向けての大発展のための基となり、力となってくれるようお願いしたい。」と式辞を述べた後、来賓の葛西弘前市長並びに吉田前学長から祝辞が述べられました。式典終了後には、同会館の見学会を行いました。

また、来賓の他、弘前市民を招き、ホール備え付けの新しいグランドピアノ「スタインウェイ」の披露を兼ねて、教育学部浅野教授、和田教授及び杉原准教授による記念演奏会が開催され、会場は盛大な拍手に包まれました。

さらに、同会館1階会議室では、4月27日から開催される大英博物館帰国記念・弘前大学創立50周年記念会館改修記念「弘前大学所蔵の土偶」展の見学会も行われ来場者の目を楽しませ、芸術と歴史に触れる一日となりました。



式辞を述べる遠藤学長



記念演奏会の様子

りんごとチューリップのフェスティバルを開催

5月8日・9日の2日間にわたり、農学生命科学部附属生物共生教育研究センター藤崎農場では、大学をより良く知っていただくために、地域の皆様に農場を開放し「りんごとチューリップのフェスティバル」を開催しました。

フェスティバル開催期間中は、2日間で約1,000人が藤崎農場を訪れて、昨年の学生実習で24品種1万球の植え付けを行ったチューリップ園や菜の花畑、教育学部附属小学校の児童がプランターで育てたチューリップ、20品種1,200本のリンゴの花等、色とりどりの花を觀賞し、大盛況のうちに終了しました。



藤崎農場ピーターバンチューリップ園

弘前大学医学部附属病院高度救命救急センター開設記念行事を開催

医学部附属病院では、このほど青森県内唯一となる高度救命救急センターの開設を記念して、5月13日に弘前市内のホテルで開設記念行事を執り行いました。

記念行事には、文部科学省大臣官房文教施設企画部の西阪昇部長、文部科学省高等教育局医学教育課大学病院支援室の玉上晃室長、三村申吾青森県知事、葛西憲之弘前市長はじめ関係者約170名が出席し、盛大に高度救命救急センターの開設を祝いました。

記念式典では、花田病院長が「本センターの大きな特徴として、青森県内唯一の高度救命救急センターであり、緊急被ばく医療の機能を併せ持っている。センター設置を機会に救急専門医の育成の場として発展させ、医師の地元定着の拠点にするべく努力することが責務である。」と式辞を述べました。続いて遠藤学長から挨拶と開設に至る経緯が述べられ、西阪文教施設企画部長、三村青森県知事、葛西弘前市長、村上秀一青森県医師会副会長による祝辞がありました。その後、浅利高度救命救急センター長からセンターの概要について説明がありました。ついで、センターの建設等に携わった工事関係者へ花田病院長から感謝状が贈呈されました。

式典終了後、高度救命救急センター前においてテープカットが行われ、引き続き施設見学会が実施されました。見学者は担当者からの最新の施設設備に関する説明に耳を傾けていました。祝賀会では、佐藤医学研究科長の挨拶の後、玉上大学病院支援室長の代読による新木一弘文部科学省高等教育局医学教育課長の祝辞、結城章夫山形大学長、杉本壽日本救急医学会代表理事の祝辞が述べられ、石戸谷一弘本学特別顧問・医学部鵬桜会理事長による乾杯へと続き、記念行事は盛況のうち終了しました。



式辞を述べる花田病院長



テープカットの様子

弘前大学名誉教授称号授与式を挙行

今年3月31日限りで退職され、本学において、教育上又は学術上特に功績のあった8名の本学元教授に「弘前大学名誉教授」の称号が授与されました。

これにより、平成22年4月1日現在における本学名誉教授の称号を授与された方は251名となりました。

授与式は、5月31日、関係学部長等列席の下、事務局大会議室において執り行われ、遠藤学長から一人ひとりに辞令書が交付されました。また、授与式終了後、創立50周年記念会館において懇談会が開かれました。

名誉教授名簿

堀内 健志	(人文学部)
新田 茂	(人文学部)
棟方 博文	(医学研究科)
佐藤 公彦	(保健学研究科)
佐藤 達資	(保健学研究科)
力石 國男	(理工学研究科)
荒木 喬	(理工学研究科)
谷口 建	(農学生命科学部)



授与式の様子

弘前大学創立60周年記念会館コラボ弘大にレンタルラボ完成

本学の産学官連携及び社会貢献拠点として、創立60周年記念会館コラボ弘大内に弘前大学レンタルラボが設置され、このほど完成しました。

今回完成したレンタルラボは全10室あり、文科省科学技術振興調整費地域再生人材創出拠点の形成プログラムで採択されている事業(弘前大学「医用システム開発マスター」養成塾)が入居しており、地元企業との更なる連携が期待されています。

教育・研究・社会連携を柱とし、産学官連携により、大学の「知」を社会に還元し、地域産業の振興を目指す企業等への支援策の一つとして、本学との共同研究等を行う企業その他、産学官連携が十分に期待できる事業や、大学発ベンチャー等にこのレンタルラボを提供します。



完成したレンタルラボ

教育研究活動等において顕著な功績のあった教職員・学外者に「弘前大学表彰」を授与

5月31日、事務局大会議室において「弘前大学表彰」表彰式が行われ、関係者列席のもと、遠藤学長より表彰状及び記念品が授与されました。

この表彰は、教育研究活動、課外活動振興支援、医療活動、教育研究支援活動、大学改革の推進、社会活動、職員の模範となるような活動等において顕著な功績があった教職員並びに学外者について、「弘前大学表彰」により表彰することにしており、今回の受表彰者は次のとおりです。

【団体】

○医学部附属病院緩和ケアチーム

がん患者の身体症状緩和のみならず、その家族をも対象とした精神心理的苦痛などの予防・改善、また医療従事者への啓発活動を精力的に行い、緩和ケアに関する知識・技術を普及させたことによる、医療活動における顕著な功績

○理工学部知能機械工学科JABEE委員会

日本技術者教育認定機構の認定による教育プログラムを推し進め、理工学部における教育体制ならびに教育手法をより一層充実させたことによる、教育活動における顕著な功績

【学外】

○高山 貢(青森地域社会研究所 専務理事)

人文学部附属雇用政策研究センターの研究活動推進と総括に尽力し、国際フォーラムの開催など、研究活動規模を拡大させるとともに、青森銀行頭取の特別講義を授業に組み込むなど、本学と同行における連携協定の精神を具体化させたことによる、教育研究活動および社会連携における顕著な功績



遠藤学長(前列左3番目)と表彰者等

第1回弘前大学出版会賞表彰式

弘前大学出版会では、平成16年6月の設立から平成21年12月までに出版した47作品を対象に優れた作品を選考委員会において選考し、弘前大学出版会賞を授与することとしました。

第1回の受賞作品には、「津軽の華」、「津軽から発信!国際協力キャリアを生きるJICA編」、「校長日記 養護学校 365days」、「あっぱれ!津軽の漆塗り」、「ようこそ、フランス料理の街へ」、「Dr. 中路の健康医学講座」の6作品が選ばれ、7月8日、遠藤学長はじめ、学内外の関係者40名が出席し、同大学創立50周年記念会館において表彰式が行われました。各受賞作品の著者には中根明夫編集長から記念の光学ガラス製オーナメントが贈られました。

同出版会は、国立大学法人としては全国初の学内組織として設立され、大学の研究成果をはじめ、教養書、教科書、地域の特色や文化の紹介など活発な出版活動を行っており、今後もこの賞を毎年の恒例行事とし、事業の普及・振興に役立てることとしています。



関係者による記念撮影

教育学部教職員16名に弘前大学表彰を授与

本学では、教育研究活動や社会活動等において顕著な功績があった職員又は団体を「弘前大学表彰」として表彰しています。この度、教育学部教職員16名(代表 大谷 良光教授)が、本学文京区内で発生した窃盗事件の被疑者逮捕に協力したことが社会活動において顕著な功績であると認められ、6月21日に行われた表彰式で遠藤学長から同団体へ表彰状及び記念品が贈られました。

本学では、弘前警察署から「他県の大学等において窃盗事件が数多く発生しており、犯行の手口は、構内に入りパンフレットを配りながら建物内を物色し、バックから財布を盗むなどである」との情報提供があり、学内において教職員・学生に注意喚起を行っていました。

今回表彰された大谷教授は、同学部敷地内でチラシを配布している被疑者を発見。先の注意喚起が頭をよぎり学部事務局に連絡しました。連絡を受けた事務局職員が校舎内を巡回し、被疑者を発見。声を掛けるところ、学外へ逃走したため、追跡するとともに警察へ通報しました。その情報を基に、弘前警察署が被疑者を発見し、逮捕につながりました。



遠藤学長(前列左2番目)と表彰者等

「第5回弘前大学鷹揚さくら会」を開催

7月16日、本学に勤務した事務系・技術系職員と現職員の交流を目的として「第5回弘前大学鷹揚さくら会」を創立60周年記念会館コラボ弘大「八甲田ホール」で開催しました。

第5回となる今回は、名誉会長である遠藤学長の挨拶に続いて、会長である渡辺財務・施設担当理事(副学長)から、「弘前大学この1年のあゆみ」と題し講演が行われました。引き続き、創立50周年記念会館「岩木ホール」に場所を移して行われた懇親会では、遠藤学長、OBを代表して吉田前学長、和田前学務部長が挨拶し、加藤元医学部附属病院事務部長の発声で乾杯した後、集まった約80名の参加者は弘前大学での思い出などで和やかに懇談し旧交を温めました。

会には、吉田前学長、和田前学務部長、加藤元医学部附属病院事務部長のほか、大学側から、遠藤学長、渡辺理事ら各理事、部課長、その他在職者の多数が参加し、大学の現状等についても意見交換を行いました。



出席者による記念撮影

2010 第1回「クリーンデー」を実施

8月10日に開催されるオープンキャンパスを前に、7月28日に学生・教職員約100名の参加により、本年度1回目の「クリーンデー」を全キャンパスで実施しました。

遠藤学長より、「受験生が進学を希望する大学の選択基準として、キャンパス内がきれいであるかを基準の1つとしているので、みなさん協力してきれいにしましょう」との激励の後、キャンパス内のごみや空き缶等を拾い、種類別に分別し終了しました。

クリーンデーは、「私たちが使うキャンパスを私たちのちからできれいにしよう」をモットーに、毎年継続して実施しており、事前にポスターや部局等に呼びかけ、実施しています。



ごみ回収の様子

平成22年「科学者発見プロジェクト」テーマ賞表彰式及び第2回共同研究体験発表会を開催

8月5日、平成22年度「科学者発見プロジェクト」テーマ賞の表彰式を、弘前大学創立60周年記念会館「コラボ弘大」において行いました。本事業は、日常のささいな「疑問や興味、アイデア等」を青森県内の小・中・高生に広く求め、その提案に基づいた研究テーマを本学研究者と共に体験する双方向的な試みであり、弘前大学の地域貢献の一環として、平成20年度より行っています。

発展性、意外性、独創性に優れた研究テーマとして、「地球温暖化防止のために、地元で豊富にある白い凝灰岩を活用してみたい」をはじめ、13件(小学校3件、中学校6件、高校4件)が「テーマ賞」に採択されま

した。表彰式では、学校関係者及び保護者などが見守るなか、遠藤学長の挨拶、加藤研究・産学連携担当理事の講評の後、受賞者を代表して、八戸市立松館小学校6年白石珠理さんから受賞の挨拶がありました。

引き続き、第2回共同研究体験発表会が行われ、「深海の水圧を利用して発電は可能か」(青森県立田名部高等学校)等6件の研究成果の発表がありました。その充実した内容は未来の小さな科学者を期待させるものであり、共同研究を通じて「関心を探求するプロセス」を研究者と共に体験することで、大学をより身近に感じてもらうよい機会になりました。



遠藤学長から表彰を受ける中学生



共同研究体験発表をする中学生

弘前大学名誉博士称号授与式を挙行

8月3日、本学とテネシー大学マーチン校との交流協定締結30周年を記念して、国際交流の発展に多大な貢献をし、本学の教育研究の進展に顕著な功績のあった同校学長トーマス・A・レークス氏に対し、名誉博士の称号を授与しました。

授与式では、神田教育・学生担当理事より名誉博士号を授与するに至った経緯及びこれまでの功績等について説明の後、遠藤学長が名誉博士記を授与するとともに祝辞を述べて授与式は終了しました。

本学では、学術文化又は国際交流の発展に多大な貢献があり、本学の教育研究の進展に寄与した功績を認められた際に弘前大学名誉博士の称号を授与しており、トーマス・A・レークス学長は、9人目の受章者となります。

「ねぶたまつり」に連続47回目の出陣

津軽の風物詩「弘前ねぶたまつり」が8月1日から7日間行われ、今年も弘前大学の「ねぶた」が参加し、昭和39年初参加以来、47年連続の出陣を果たしました。今年は、8月2日、4日、6日の三夜の合同運行へ出陣しました。

運行には、遠藤学長、藁科理事、渡辺理事をはじめ、各理事や各部局長を先頭に教職員、留学生、附属学校の児童・生徒、附属幼稚園の園児、近隣町会の子供たちなど延べ約1,000人が参加、「ヤーヤドー」の掛け声も勇ましく、夕暮れから約3時間余り市内を練り歩きました。小型ねぶたや灯籠を従えた極彩色の鏡絵「趙雲江を截って阿斗を奪



勇壮な弘前大学ねぶた

「弘前大学オープンキャンパス」を開催

8月10日、「弘前大学オープンキャンパス」を開催しました。県内外の高校生、保護者等を含めて、昨年より約3割増の5,827名が参加しました。

オープンキャンパスでは、模擬講義、実験実習体験、なんでも相談コーナー、先輩と語ろうコーナー等、多彩な企画を準備しており、参加者は様々な企画に参加して、弘前大学の雰囲気を感じていました。

さらに今年初めて「弘前大学ねぶた」を正面玄関右事務局前に展示し、来場者を出迎えました。参加者は弘前ねぶたの勇壮な姿に感動し、



キャンパスを散策する高校生等



遠藤学長と表彰者等

う、見送り絵「孫夫人」、袖絵「風神・雷神」を描いた高さ約7mの勇壮なねぶたは、沿道の市民・観光客から大喝采を浴びました。

また、医学部附属病院構内において、恒例となっている入院中の子たちの参加による「小型ねぶた」の運行も併せて行われ、患者さんたちもお祭り気分を満喫し、ひとときを楽しんでいただきました。

今年度も、岩手大学と弘前大学の国立大学間の連携、協力を強力に推進するため、平成15年から大学相互の祭(盛岡さんさ踊り、弘前ねぶた祭り)交流を行い、地域文化の相互理解を図っており、8月6日は、岩手大学の菅原副学長・西崎副学長らが遠藤学長と共に、弘前大学の「ねぶた」の先導を務め、大学間の連携をアピールしました。



観客を魅了する大太鼓

記念撮影を行うなど大変好評を得ました。

また、キャンパス内の歴史的な建物や各学部を紹介するキャンパスツアーの実施、総合情報コーナーでは、高校生らの関心が高い入試情報、奨学金、学生寮、就職情報等について担当者がわかりやすく説明を行いました。

特別企画「学長と話そう」では、遠藤学長が多くの高校生らと懇談を行い、本学の教育理念、魅力などについて理解を深め、本学への進学意欲を高めていました。



遠藤学長と懇談する参加者

地域の「知」の拠点を指して、 産学官で取り組む 「医用システム開発マイスター」 養成塾



大学の「知」の財産を、地域の技術者に提供する産学官の連携事業「医用システム開発マイスター」養成塾。広く学外に視野を拡大し、昨年度から開講したこのプログラムは、今年4月から新たに第2期生を迎え、地元企業の中核となる若手技術者の育成を図っています。

医用システムの研究開発を 先導する人材の育成を目指す

本学には、今日の医療を支える機器の原点がいくつか存在します。たとえば1953年に、放射線講座の故高橋信次教授によって開発された「回転横断撮影法」が、のちのX線CTやMRIの基本であることは良く知られています。また、いわゆる胃カメラをはじめとした内視鏡の原点は、本学第一内科松永藤雄教授らの開発した「大腸肛門鏡」にあります。しかし当時は、これらを製品化できる企業が地元になく、製造の拠点は東京にありました。

それからおよそ60年、津軽地域にも高シェア製品を提供する精密機械関連産業の集積が形成されつつあります。とはいえ、その一方で受け皿となる人材が、まだ

十分に育っていないのも現状です。

そこで本学では青森県と連携し、医用システムの研究開発を先導すべく人材の育成を目指した「医用システム開発マイスター」養成塾を開講。精密機器の設計・製造を担う地域の技術者を対象に、あらたな医用システムを考案・開発する実践力の向上を図ります。

ものづくりの基礎から 医用工学の最前線までを学ぶ

本プログラムは、ものづくりの基礎から最新の医用工学までを学ぶとともに、工学以外の臨床検査の体験等を組み入れたカリキュラムを提供。理工学研究科や医学研究科の教員、さらに県内研究機関の専門家などが講義を行います。受講者は半

年間の「基礎コース」を受講したあと、認定試験を経て一年半の「アドバンスコース」に進級します。

基礎技術者の養成を目的とした「基礎コース」では、精密機器の設計・製造技術からマイクロ・ナノテクノロジーにまで踏み込んだ専門知識と技術を修得。また、高度技術者の養成を目的とした「アドバンスコース」では、医療・検査のための医用システム開発に関するニーズを把握・分析できる能力を修得するとともに、企業間のインターンシップやPBLゼミナールにより、広い視野で課題を解決するノウハウを身につけます。

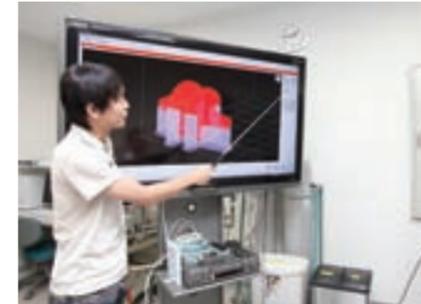
受講者には、各コース修了時にユニット修了証書を授与するとともに、優れた研修成果を挙げた受講者を表彰する制度もあります。

新技術・新製品・新産業を 創出し、津軽地域の再生を図る

産学官の連携のもと推進する本事業は、地元企業の中核となる人材の育成を目指すとともに、地域の産業振興を図ることを狙いとしています。

津軽地域の多くの企業はそれぞれ得意とする技術を有していますが、医用システムの一部あるいは全体をまとめるには、その柱となる技術が必要です。そこで本ユニットが、地域の若手技術者の技術力向上に貢献。さらに企業間の人的ネットワークの構築を通じ、企業がオンリーワンの技術を創出、自治体とその医用システムの開発・事業化を支援することによって、地域の再生を実現させます。

本学ではその具体的な目標として、コース開始後5年目までに12名の「医用システム開発マイスター」を地域に輩出。若手技術者による新技術・新製品・新産業の創出を通じ、津軽地域の活性化を目指します。



浅利 達也さん (35歳)

アドバンスコース

青森県大鰐町出身
青森オリンパス株式会社勤務
信州大学工学部卒

**新しい製品が世の中に出ることは大きな喜び。
次の製品に取り組むときのやる気へとつながります。**

産学官の取り組みとして、大学ならではのコアな技術や広い分野の知識を修得できる部分に魅力を感じています。社内でも研修等もちろんありますが、こういった講義は社会人になると滅多に受けられる機会がないので。

受講していて感じるのは、学生のころとの意識の違いですね。学生のときは“覚える”という印象でしたが、いまは“理解する”というイメージでしょうか。目的がはっきりしてるぶん、身につき方も早い気がします。

また講義を受ける上で大切なのは、アウトプットの仕方。単に“知識”をつけることを目標にするのではなく、ここで得た知識から新しいものを開発するため“手段”を発見することを目標にしています。

技術者として専門技術を持つことは当然ですが、それを土台に臨機にに応じた技術を身につけ、なおかつ活用できること。常に技術は進歩し環境も変わっているので、柔軟に対応し積極的に学ぶことができる人が、自分の考える技術者です。



これから受講される方へ

それぞれが会社での業務を持ちながらの受講であり、ときには忙しい日々が続くこともあります。それでも違う企業の仲間との触れ合いは、とてもよい刺激になると思います。今後仕事をする上でも非常に良い経験になるのではないのでしょうか。



須藤 大伸さん (31歳)

基礎コース

青森県田舎館村出身
弘前航空電子株式会社勤務
東京工科大学工学部機械制御工学科卒

**ひとつの仕事を終えた瞬間、ひとつの製品が生まれる。
技術の仕事の魅力は、そんなところにある気がします。**

もともと地元の技術力に貢献したいという思いがあり、上司からの推薦を得て応募しました。以前から医療機器への興味はありましたが、実際やってみるとサイズの違いに戸惑ったりしますね。やはり医用となると扱う単位がマイクロやナノになりますんで、普段会社でやっていることは製造工程がまるきり違うわけです。

それでも新鮮さは常にあります。たとえば座学などを例にあげると、学生のころは抽象的にしか捉えられなかったことが、いまは具体性を持って捉えることができる。そういう意味では学生のころより楽しい気がします。また先生方のほとんどは企業出身であり、経験談など自分の現状と照らし合わせて聞くことができるので、とても馴染み易く感じています。

仕事をしながら学ぶという点では、レポートなど時間的に厳しいときもありますが、講義のある金曜までに仕事を終わらせようとか、逆にいい意味での目標になったりしています。今後の目標は医療の分野で役立つ技術力を身につけ、他業種の仲間と協力して医療機器を開発することです。

これから受講される方へ

働きながらの受講は大変と思うかもしれませんが、会社内に居ては分からない知識・情報を得る事ができ、また他業種の仲間と知り合えるので、有意義な時間を過ごすことができると思います。



国立大学法人弘前大学の役職員の報酬・給与等について

国立大学法人弘前大学では、総務大臣が定める「国立大学法人等役員の報酬及び職員の給与水準の公表方法等について(ガイドライン)」に基づき、役職員の報酬・給与の水準を公表しております。

公表内容の詳細につきましては、「弘前大学ホームページ <http://www.hirosaki-u.ac.jp>」の「組織情報」のページをご覧ください。

◎役職員の報酬・給与等について

千円

役名	平成21年度年間報酬等の総額			就任・退任の状況		
	報酬(給与)	賞与	その他(内容)	就任	退任	前職
法人の長	18,506	13,424	5,030			
理事A	12,836	9,247	3,500			
理事B	12,732	8,728	3,429	4月1日		◇
理事C	11,284	7,795	3,435		1月31日	
理事D	12,822	9,247	3,500			
理事E	9,727	6,536	2,934		1月31日	
理事F	1,324	1,304	0	2月1日		
理事G	1,487	1,452	0	2月1日		
監事A(非常勤)	3,510	3,510			3月31日	※
監事B(非常勤)	600	600				

・「前職」欄には、役員の前職の種類別に以下の記号を付す。

退職公務員「※」、役員出向者「◇」、独立行政法人等の退職者「※」、退職公務員でその後独立行政法人等の退職者「※※」、該当がない場合は空欄。

〈注〉非常勤役員等給与においては、寄附金、受託研究費その他競争的資金等により雇用される職員に係る費用及び人材派遣契約に係る費用等を含んでいるため、財務諸表附属明細書の「(14)役員及び教職員の給与の明細」における非常勤の合計額と一致しない。

◎総人件費について

千円

区分	当年度(平成20年度)	前年度(平成19年度)	比較増△減	中期目標期間開始時(平成16年度)からの増△減
給与、報酬等支給総額(A)	10,733,301	10,981,165	△247,864(△2.3%)	△863,126(△7.4%)
退職手当支給額(B)	879,302	1,282,732	△403,430(△31.5%)	△211,542(△19.4%)
非常勤役員等給与(C)	1,617,628	1,492,254	125,374(8.4%)	156,690(10.7%)
福利厚生費(D)	1,431,264	1,491,992	△60,728(△4.1%)	△159,963(△10.1%)
最広義人件費(A+B+C+D)	14,661,495	15,248,143	△586,648(△3.8%)	△1,077,941(△6.8%)

◎職員と国家公務員及び他の国立大学法人等との給与水準(年額)の比較指標(事務・技術職員/教育職員(大学教員)/医療職員(病院看護師))

(事務・技術職員)

対国家公務員(行政職(一)) **88.4**

対他の国立大学法人等 **99.2**

(教育職員(大学教員))

対他の国立大学法人等 **93.9**

○教育職員(大学教員)と国家公務員との給与水準の比較指標 91.4
(注)上記比較指標は、法人化前の国の教育職(一)と行政職(一)の年取比率を基礎に、平成21年度の教育職員(大学教員)と国の行政職(一)の年取比率を比較して算出した指数である。なお、平成19年度までは教育職員(大学教員)と国家公務員(平成15年度の教育職(一))との給与水準(年額)の比較指標である。

(医療職員(病院看護師))

対国家公務員(医療職(三)) **93.1**

対他の国立大学法人 **95.3**

〈注〉当法人の年齢別人員構成をウェイトに用い、当法人の給与を国の給与水準(「対他の国立大学法人等」においては、すべての国立大学法人等を一つの法人とみなした場合の給与水準)に置き換えた場合の給与水準を100として、法人が現に支給している給与費から算出される指数をいい、人事院において算出

弘前大学の魅力をアピール 漫画雑誌6誌への広告掲載を行いました!!

弘前大学の魅力を全国の受験生に発信するために、本学では、マンガ雑誌(週刊少年ジャンプ、週刊少年サンデー、週刊少年マガジン、Cheese!、デザート、Cookie)6誌への広告掲載を行いました。

マンガ雑誌という特性を鑑み、本学の先生が総力を結集し、学問の視点で、マンガを読み解くという内容になっております。

また、雑誌広告への掲載と合わせまして、WEB上でも本学の新しい取り組みを公開しました。



Web版は、こちら
左のQRコードを
読みとって
ご確認ください。

<http://www.hirosaki-u.ac.jp/ad/mangaku/>

ひろだい vol.15 2010年9月発行

弘前大学総務部総務課

表紙：外来診療棟屋上のヘリポート

「ひろだい」に関するご意見・ご感想をお聞かせください。

「ひろだい」はWebでもご覧いただけます。下記URLからお進み下さい。



弘前大学

〒036-8560 青森県弘前市文京町1番地
Tel.0172-39-3012 Fax.0172-37-6594
E-mail: jm3012@cc.hirosaki-u.ac.jp
<http://www.hirosaki-u.ac.jp>

